

田口ランディ「時の川」に見られる身体性へのこだわり

——長崎源之助『うそつき咲つべ』を参照として

相川 美 恵 子

1. はじめに

戦争を題材にした児童文学^①では、体験や知識を持つ者からそれを持たない者へ、という一方向的な情報伝達経路が生まれやすい。また反戦平和のメッセージも込められる。反戦平和は「正しい」。ただ、正しいことを正しいのだから知っておいて欲しいと伝えることは、受け手には時に負担になるだろう。「正しさ」を前にして反論するのは難しいからだ。誤解を恐れず言えばこれは「正しさの暴力性」とでもいうものではないか。これに対して藤田のぼるから次の指摘を受けた。

児童文学が子どもに向けて何らかの形でおとなの側からのメッセージを発する装置であるならば、その暴力性にはこれは「屋根裏の遠い旅」のテーマでもありますが、そこで語られる反戦平和への願いとは逆行する状況が目前に進行している（つまり、子ども読者が作品からのメッセージと現実社会からのメッセージの狭み

撃ちになってしまふ）ということがあるからではないのか。^②

虚を衝かれた。反論できない。例えば中立という名のもとに学校教育から政治的なものを排除することで、セージってコワイもの？という警戒感を子ども心に育ててしまふ。教科書記述を書き換え、歴史を学ぶ土台である史実を伝えない^③。もちろん戦争について学ぶ機会は授業で保証されているが、自発的に外へ内へと興味のままだが広がっていく自由さは持っていないのか。様々な教育的文化的政治的状況の積み重なりが、子どもと戦争との距離を歪にしている。したがって子ども読者が「ああ、また、センソーの話ね」と耳を塞いだ時、それを戦争を題材にした児童文学への「正しさの暴力性」のせいだけにすることは明らかに誤っている。だが、形振り構わず押し通そうとしてみる力に対し同じだけの熱量で押し返そうとすれば、間に挟まれた子ども読者は疲れてしまふ。「ああ、また、センソーの話ね」という醒めた反応は、彼らが無意識に取る防衛姿勢なのかもしれない。

いずれにしろ、ポピュラーカルチャー^④がネット空間を取り込んで

肥大化し、政治言語が事実を明らかにするより事実を隠すことに長けてしまった昨今では、戦争とセンソーを判別することはかつてより難しい。そんな状況下で、子ども読者に敬遠されがちな「正しさ」をその暴力性の発動を抑えつつ伝え、戦争をセンソーになる手前で食い止めようと悪戦苦闘してきたのが、戦争を題材にした児童文学であろう。今回取り上げる田口ランディの短編「時の川」もそうした悪戦苦闘の産物である。

「時の川」は『被爆のマリア』⁹⁾に収録された四つの作品の一つである。目次順に四作品の内容を簡単に示しておく。

・「永遠の火」|| 結婚式のキャンドルサービスで「原爆の火」を使つて欲しいと父親から頼まれて戸惑う三〇代の女性の話。

・「時の川」|| 修学旅行で広島を訪れた男子中学生と被爆体験の語り部である老女が出会う話。

・「イワガミ」|| 広島に取材に入った女性作家が、偶然に出会う一冊の古書に導かれて太古の時代まで遡つたところから広島とは何かを考える話。

・「被爆のマリア」|| 人間関係に翻弄されて心身ともに擦り切れてしまった女性が、長崎の爆心地に残る被爆のマリア像に魅入られていく話。

「イワガミ」の主人公である女性作家は広島に入った動機を次のように言う。

そもそも平和ってなんだろう、それがわからない。私には訴えるべき平和のビジョンがなかった。(略) 終戦から六十年。戦争の記憶を伝える大切さはわかる。では、いつたいていどうやって伝えたい。『被爆のマリア』一一九頁、以降は著書名を省略する)

こうした言葉はすべての作品中で反復される。一九五九年生まれで被爆者でも被爆二世でもなく、もっと言えば広島出身でもなく広島に住んだこともない作者が、作中の言葉を借りれば「パーチャル」ではない戦争、戦争の「リアル」をどうしても理解できずに苦しんでいる様子が手に取るように伝わってくる。『被爆のマリア』は、戦後世代の作者が戦争や原爆をどうすれば我が事として受けとめ、伝える側に回れるのかについて四苦八苦しましたという報告であり、戦争を題材にした児童文学に関わろうとする戦後世代が、絶えず立ち返るべき場所を示している。

四作品に共通しているもう一つの点は、被爆体験者の証言を聞くとか読むなどの言葉を回路にして「リアル」を了解する道筋は、選択肢から外されていることである。「永遠の火」ではキャンドルサービスを通して、「イワガミ」では不思議な本を通して主人公たちは被爆の記憶に近づく。「イワガミ」に登場する本は被爆者が書いたものではあるが、被爆体験の記録ではない。また「被爆のマリア」では、主人公が自分の生きている社会もまた、ある種の戦場なのだと気づくことがきっかけとなる。

「時の川」も例外ではない。この後詳細に見て行くことになるが、語り部の言葉は少年の心に届かない。ではいかなる道筋を辿つて彼は被爆の記憶と出会うのか。作者の悪戦苦闘ぶりを丁寧に辿りたい所以である。

2. 導入部分で提示される「正しさの暴力性」

「時の川」は、修学旅行で広島原爆資料館に来た中学生の夕方

才と、語り部として壇上に立った八〇歳のミツコが出会い、別れるまでの物語である。二人については後述するとして、まず、導入部に注目したい。修学旅行の事前学習に臨んだ中学生たちの感想が、タカオの視点から書かれている。

タカオも広島で原爆を体験した人たちの証言を読んだ。読んでみればいかに原爆が悲惨でむごいことかわかる。誰でもわかる。幼児でもそれくらいの理解力はあるだろう。／わかつてしまったら、どうするのか。その後のことがわからなかった。一緒に泣くのか、嘆くのか、怒るのか。感情を添わせてしまった後のことを教師は教えてくれない。広島に落ちた原爆は、子供が共感するにはあまりにも規模の大きな暴力なので、子供たちは仕方なく事なかれ主義を取った。(七一頁、なお、／は改行を意味する)

この箇所は、元ひめゆり学徒の話を書く企画に参加したひとりの高校生が言った次の言葉、「戦争はいけない、平和は大切だ。こんなこと誰だつてわかつてる。わかりきったことを言い合つて、わかりきった結論に達する。これって、WHY?を許さない学校の平和学習と同じじゃん。」を想起させる⁶⁾。

二つめは、資料館内で、被爆した物を展示ガラス越しに見た感想が書かれている箇所である。

だが、たぶんこれを展示した人たちが期待しているであろう何かを感じることはできない。逆はその期待の大きさを理解できるので、タカオはひどく居心地が悪かった。(七十二頁)

伝え手が強引なわけでも受け手が不誠実なわけでもないのに、受け手は決まり悪さから苛立つたり無関心を装いたくなる。ここに「正

しさの暴力性」が認められる。物語は両者の不幸な出会いから始まるのである。ではその後、どのような軌道を描いて何処に着地するのか。

3. タカオとミツコ

タカオが何年生であるかの記述はないが、二年か三年と推測できる。四歳で鼠蹊部に小児癌を発症し、手術、放射線、抗がん剤治療で生き延びたが、治療の後遺症で極端に身長が低い。中学入学後は原因不明の光過敏で頭痛やめまいに苦しんでいる。

病弱なタカオは幼くして、自分は人並みの人生は送れないのだと悟った。それでも「すべて受け入れて生きてきた」。だが、二年前に父親が肝臓癌で死ぬ。まだ四〇代半ばだった。「父がんで死んだとき、タカオはどうしても、負けた父を許せなかった」。この文については少なくとも次の二通りの解釈が可能だろう。一つは死ぬ前から生きていような自分を置き去りにして先に逝ってしまった父親が、タカオには自分を裏切ったように感じられたのだという解釈、もう一つは、タカオが父親の死に自分の将来を重ねて絶望してしまつたという解釈である。いずれにしろタカオが父親へのわだかまりを持ち続けていることを確認できればよい。

ミツコは現在八〇歳である。被爆後に顔の皮膚移植、さらに甲状腺癌の発症と再発を繰り返し、現在も再発の恐れがある中で語り部を続けている。語り部を始めたのは五年前である。「ずっと差別されて生きてきた。できればそっとしておいてほしかった」し、「辛い思い出を語るなんて金輪際ごめんだと思っていた」のだが、何度

も説得されて「死んでいった人たちへの供養でもある気がし」、引き受けたという経緯を持つ。当初は記憶が生々しく蘇って言葉に詰まることが多かったが、「だんだんと感情を入れられない話し方を工夫するように」なり、「語りを暗記し」、「なんとか昂ぶる感情と折り合いながら語り部を続けてきた」。五年間ミツコを支えてきたのは聞いてくれた子どもたちからの感謝の手紙と「原爆を許せない思い」であった。ここでは、ミツコが自分の被爆体験を整理し、他者に向けて語り直す行為とアイデンティティの再構築との関係が問題になってくるだろう。

二人が最初に出会ったとき、ミツコは壇上においてタカオは他の生徒と一緒に客席にいた。つまり記憶の伝え手と受け手はかなり距離をおいて向かい合っており、整然と語られる被爆の記憶は壇上から客席へと一方向性を持っていわば下げ渡される。しかもミツコからは、タカオの姿は「案外と」「よく見え」ており、顔色の悪さすら察知できていたのだが、タカオは「強い照明の反射で」ミツコの顔がよくわからない。両者の関係を象徴的に示す表現である。

4. 封じられた「正しさの暴力性」

タカオはミツコの語りについては「あらかじめ読んでいた証言集の中のいくつかの話と似たようなもの」だとしか感じなかった。彼が驚倒したのは、ミツコが被爆後も生き延びてきたことだった。ミツコの「生命体としての強い力」は、自分の肉体的弱さ、さらには父親の悲惨な最期を想起させずにはおかない。タカオは「やつかみとも羨望ともいえない湿った感情」を抱く。

一つの街を焼き払い、生命を根絶やしにしようというおそるべき悪意によつて作られた核兵器にすら打ち勝つことのできるのは、人知を超えたとてももない生命力の持ち主であり(略)。

この人は勝者なのだと思った。(七九頁)

生命力とは生まれつきのものなのだ。強い人間は何があろうと長生きする。原爆を浴びてすら。(中略) 苦しみを乗り越えて勝利する、それはあなたのような強者の言い分なのだ。僕のような弱い人間には最初から生きる意味などない。(八五頁)

ミツコの証言や主張はタカオには届いていない。それどころかタカオは、原爆にすら勝ったミツコに嫉妬し、以前から抱いていた運命論的人間観(強者/弱者という二元論的人間観)の正しさを改めて確認するのである。

この伝達不可能性により、「正しさの暴力性」は無化される。ただし一般的にはこれは驚くに値しない。米山リサの言葉を借りれば、証言の受け手によつて「意味が恣意的に横領されてしまう」ことを伝え手が防ぐことはできない。証言を語り続けるとは、受け手によつて「意味が恣意的に横領されてしまう」ことに耐え続けることでもあるのだ。この問題は先に挙げたミツコのアイデンティティの問題と絡んでくるので後述したい。

5. 二人の再会とミツコの変化

ミツコの講演が終わった後、タカオは独り館外のベンチで横になり、集合までに与えられたわずかな自由時間を体力の回復に充てていた。そこへミツコが通りかかり、いかにも具合の悪そうなタカオ

に声を掛ける。二人はベンチに並んで座り、自然とお互いを間近で観察することになった。最初の出会いが、距離を隔てて向い合い一方からしか他方が見えないという非対称の関係だったことと比べると、この位置関係は関係性の変化を示唆していて興味深い。

さて、再会と同時に二人はお互いの容姿の歪さを確認しあう。すなわち、タカオはミツコの「パッチワーク」のような顔面の皮膚や首筋の「ぬらぬらしたケロイドの痕」「左右に歪んでいる」鼻など、「人間の身体に刻まれている原爆というものを確認」する。一方、ミツコは「顔は子供らしさがなく大人びているのに身体は子供」のタカオを一瞥し「侏儒」という言葉を思い出す。

わずかな沈黙があり、「負けてないんですね」というタカオの言葉で会話が始まる。真意を問うミツコに、タカオはミツコを初めて見た時の衝撃を口にする。

「原爆で死なないうつてすごいです。選ばれた強い人だと思います」
(九四頁)

タカオは「自分の言葉がこの老女を動揺させたのだとわか」る(ミツコの呼称が「女性」から時間の痕跡を記す「老女」に変わるのとはここからである)。もし、タカオが「原爆つてすごく恐ろしいんですね」とでも言ったのならミツコは「動揺」などしなかつたに違いない。残酷なほどの伝達不可能性、つまり再び米山リサの言葉を借りれば語り手の予想を超えた「恣意的な横領」がミツコを揺さぶつたものと推察できる。次のセリフは、こうした「横領」に対するミツコからの抗いである。

「原爆というのは、おまえたちは無用だ、ということだと思っ
の」ミツコは毅然として言った。／「人が暮らしている真上に

あんなものを落とすわけだから。そこにいる人間は殺してもいいということ。おまえたちは無用だ。死んでいい存在だ。そういうことです。庭にまく殺虫剤のようなもの。それが原爆でしょ。」／資料館で見た真つ黒い原爆雲が蘇る。／「でも、そんなことは誰かに決められることではありませんから。だから、私は、なにかがあるうと、人間として生きてきたんです」
(九九頁)

ところが、言葉は自分に戻ってくるのである。

しかし、その言葉はどうしたわけかミツコを裏切つて、ぼとりと足下に落ちたのだ。唾然として、ミツコは足下を見つめた。

(九九頁)

ミツコの物語は、タカオと別れて元安川のほとりを歩いていた時に彼女の心に浮かんできた次の言葉で締めくくられる。

語り部をやめようかな。／ふと、そう思った。これまで決心がつかなかったが、やめてもいいような気がしてきたのだ。

(一〇三頁)

6. 修学旅行と「語り部」の相互展開過程から派生した問題

では、なぜ先の言葉はミツコを「裏切つた」のか。さらにそのことが、もしくは解釈のしようによってはタカオとの会話の過程そのものが、なぜミツコに語り部活動からの引退を考えさせる引き金になったのか。そもそもミツコが始めた「語り部」とはどのようなものか。

そこで、いささか迂回することになるが、修学旅行の中に「語り

部」が「制度」⁽⁹⁾として組み込まれてきた過程を辿ることにする。なぜなら、語り部活動は修学旅行先としての広島が発見されたからこそ成立してきたからである。その上で語り部活動の展開に伴って派生してきた問題点を整理し、ミツコの問題へとつないでいきたい。資料にまとめたように、反核運動が最も大衆的な盛り上がりを見せたのは一九八二年であり、被爆者の証言を求める声も高まる。この年、各自治体の教育委員会は、非核平和都市宣言の採択を機に広島への修学旅行を認めていく。教科書問題が起きて教育現場全体が危機感を抱いたことも大きかった。この流れを受けるかのように、同年と翌々年に代表的な二つの語り部の会が結成されている。こうして語り部活動は広島修学旅行に組み込まれた。

別の視点から言えば、語り部活動は平和教育——その柱は被爆体験の継承である——の枠組みに包摂されて外側へは出にくくなった。背景には、党派対立やイデオロギー問題によって分裂した六〇年代の反核運動への反省がある。党派性やイデオロギーを越えて繋がる領域が「平和教育」であり、「被爆体験の継承」なのである。

やがて、日本の加害性や在日被爆者の慰霊問題等が浮上してくると、教育現場からもそれらを語りて反映して欲しい、あるいはすべきだ、という要望が出されるようになった。他方、そうした政治的な問題には触れず被爆体験だけを語ってくればよいという声も当然、語り部側に届けられた。語り部への要求は多様化し続けた。

語り部活動が修学旅行においていかに重要であったかがわかる。しかしそれは同時に、語り部が常に聞き手の要望に支えられていることを意味する。聞き手がいなければ語り部活動は成立しない。語り部活動は受け身の活動なのである。

そもそも、被爆者が語り部になる過程も受身で始まることがほとんどであったと、多数の被爆者からの聞き取りを行った根本雅也は記している⁽¹⁰⁾。根本に拠れば、彼らは誘われて渋々語りを始めていくうちに、聞き手から届く感想文等に励まされ、語り手として育っていくという。やがて、聞き手の要求に応えようと積極的に国際情勢や世界の核状況なども学び、根本の言葉を使えば「正確」に伝えられる語り手をめざす。根本の言う「正確」な語りとは、米山リサの言う「たまたま聴衆となる疑い深い人々」のための「コミュニケーション的パフォーマンス」⁽¹¹⁾としての語りと同義である。要するに聞き手に尽くす語りである。語りの画一化という問題も、語り手が原爆投下に至る歴史的背景や原爆についての科学知識を学び、個々の被爆体験をそれらの中に客観的に位置づけようと勉強会などを重ねてきた過程と無関係ではない⁽¹²⁾。語り部が聞き手の多様な要求に応じられるよき語り部になろうとすればするほど語り部活動は聞き手に、これも根本の言葉だが、「従属」していかざるを得ず、同時に生々しい体験の再現から遠ざかっていく。

しかしそれ以上に危惧されることとして、根本はこの間に被爆体験をどのように伝えるかばかりが前景化し、「なぜ継承するべきなのか、なぜ、それが大事なかが問われなくな」ったことを指摘する⁽¹³⁾。

7. ミツコの語り部としてのアイデンティティ形成と苦悩

ここからはミツコと語り部活動との関係に触れている文章を具体的に辿りながら考察を進めていきたい。ミツコが「誘われて渋々語

りを始め「た被爆者の一人であることは既に記した。では、彼女はそのような過程を経て「コミュニケーション的パフォーマンス」としての語りができるまでになったのか。

被爆者は通常、体験を言葉に書き起こすところから語り部への第一歩を踏み出す。生存者の体験を、米山は「語りえぬ」体験だという。なぜならそれは、「言葉にすると嘘になる」体験だからだ。言葉に置き換えた瞬間に「体験の真正さ」が保たれないとも言っている⁴⁴⁾。生存者が語り部になるとは、自分の「体験の真正さ」を犠牲にして聞き手のために「コミュニケーション的パフォーマンス」を提供する存在になることである。

この第一歩が書くという作業だが、いかに壮絶なものかは「何枚も何枚も原稿用紙に書いては破り、書いては捨て」「途中、苦しくはいたり、熱を出して寝込んだりもした」という作中の表現から窺える。ついで、初めての語りでは「しゃべっているうちに、匂いや、それから光景が、ありありと浮かんできて」「感情を抑えるあまり、身体が膠着してしまう」こととなり中断してしまう。それでも「あたたかい拍手」や涙に支えられ「語り部をやっている」と本気で決意した。とはいえ、どうしても語っているうちに「あの原爆の瞬間へと戻ってしまう。震えがきて言葉が出なくなる」。そこでミツコは「だんだんと感情を入れられない話し方を工夫するようになり、「語りを暗記」することを学んだ。

ここで一つの疑問が生じる。「体験の真正さ」と「コミュニケーション的パフォーマンス」の間でミツコが揺らぐことはなかったかという疑問である。前者は八月六日あの日あの場所でのミツコを襲った文字通り筆舌に尽くしがたい唯一無二の体験をいう。それをそのまま

再現することなどどうもできない⁴⁵⁾。どうもできないことを人前でわかりやすく行うのが後者である。語り部活動を続けていく中で、前者の記憶が後者に侵されていく不安はなかったのだろうか。後者が日々新しく塗り替えられていくにつれて、つまり、聞き手と共有する記憶が次々更新されていくにつれて、前者が相対的にないがしろにされていく痛みや、逆に前者の真实性に引き戻され、語り部活動の演技性が自覚されることはなかっただろうか。

ここで足下に落ちた言葉に話を戻せば、落ちた言葉の自身そのものよりも落ちたことが、またミツコがそれと感じたことが重要だったのでないか。「被爆者としてのミツコ」と「語り部としてのミツコ」がこれ以上共にやっていくことには無理があることを象徴的に表したのが、落ちた言葉だったと考える。

ミツコの物語は事実上、ここで終わる。戦争の記憶の伝え手が受け手と出会ったことをきつかけに、記憶を伝えることを辞めようかなと思う結末は珍しい。『被爆のマリア』の文脈にこれを置けば、体験者から証言を聞くというだけでは戦争の記憶は伝わらないことを暗示している⁴⁶⁾と読める。

ところで、広島の語り部を描いた児童文学といえは長崎源之助の『うそつき咲つべ』⁴⁶⁾が真つ先に挙がる。級友らが勤労奉仕で建物疎開作業に従事させられていた頃、咲子と道子はこつそりと農家の作業に行っていたために被爆を逃れて生き延びた。戦後、道子は投下時の惨劇を逃れたはずの咲子が語り部になり、全身全霊で被爆体験を語っているのに出くわす。まもなく咲子は平和記念公園近くの路上で倒れ、白血病で亡くなる。生活保護者用のアパートで葬儀は執り行われた。疎開作業をずる休みして生き延びた自分を恥じ、

娘を探しに被爆直後の広島に入った母親が白血病で死んだことに罪の意識を感じた咲子は、「語り部」となり「被爆者としての戦後」を生ききった、という物語である。

作品の詳細な分析評価は措くが、一貫してここにあるのは、言葉への信頼である。物語の舞台は敗戦後四〇年余り経った時代、咲子の語りを聞くのは修学旅行中の中学生、新聞には中学生が語り部の証言を聞いて「三たび原爆を許してはならないと思いました」と深く感動した旨の記事が載る。咲子は被爆直後に短期間だけ爆心地に入っているものの、直撃は免れており、語りの中身は全て作り話。にもかかわらず彼女の語りには瀕死体験に裏付けられた真実、つまり「三たび原爆を許してはならない」があり、それは体験のあるなしを越えて伝わるものとされる。言葉への信頼以外何物でもないだろう。もちろん、中学生は咲子の言葉に気圧されたり、決まり悪さを感じたり当惑したりなどしていない。「正しさ」は暴力にならない。

さらに言えば、咲子は作り話をあたかも本当であったかのように必死で語り続けるうちに、いつのまにか虚構の物語を自分の体験だと信じて生ききってしまった、そのような女性として描かれる。他者の体験が特定の人間に憑依しその人物の人生を完全に乗っ取ってしまうのだ。半ば望んで乗っ取られたのだとしても、やはり被爆体験とはそれほど残酷で途方もなく非人間的なのである。もちろん咲子の中では「体験の真正さ」と「コミュニケーション的パフォーマンス」の乖離などは起きようがない。このことは次のように言い換えることができる。『うつつき咲っぺ』では、それぞれの被爆体験を持つひとりとひとりと広島が記憶する広島の被爆体験とは一体化してい

る。だから語れなくなった者の代わりを引き継いで、それを我が事として語る者が語るその記憶は、個人の記憶でありつつ同時に広島(7)の記憶でもある。

他方、「時の川」はこうした言葉への信頼や、記憶を伝えるもの受け取るものの関係性が途絶えたところに成立してきている。『うつつき咲っぺ』の作者が実際に兵士として戦場に送られた経験を持つのに対して、「時の川」の作者が「そもそも平和とてなんだろう」とつぶやかずにはいられない戦後世代であるからか。または、実は同じ事柄をこちらとあちら、別の視点から描いているだけなのか。さらには一九九五年と二〇〇六年という出版年の違いに投影される時代の相違なのか。このあたりは問いとして提示しておくよりないが、戦争なのかセンソーなのか判然としない時代に生きている私たちは、おそらく「時の川」的世界に佇んでいる。

8. タカオの変化

さて、タカオは、去っていくミツコが「あまりに傍げでぞっとし」、「もしかして自分は広島で被爆者の亡霊とであったのではないか、(略)あの老婆はもう死んでいてこの世の者ではないのかもしれない。」と感じる。ミツコの印象が、原爆を生き延びた強い人から「亡霊」に変化している。さらに、「亡霊」が「すべるように橋を渡り、向こう側へ行こうとしている」という表現が続く。ミツコが選んでいく「向こう側」は死者の世界と考えられる。だとすればミツコはこの世とあの世と繋ぐ介添人であろうか。まるでそのことを証明するかのよう

にいた。

「ぬめった感触が靴底に伝わり」「思わず足をあげる」と「紫色に糜爛した皮膚が靴底にへばりついて離れない」。それを「靴底をこすりつけてはがす」。「燃えながら悶え呻いている」生者と「無残に焦げた黒い死体」。それらから逃げるようにタカオは「泣きながら歩いている」「タカオは怖かった」。やがて彼は父親と出会う。父親はミツコとタカオが座っていたベンチに座っていて、タカオを見つけると立ち上がり、大きく両手を広げ、タカオを受け止める。「向こう側」の描写は「おとうさん、ごめんなさい」というタカオの言葉で閉じる。

「向こう側」が、癌で死んだ父親とタカオの和解の場所に設定されていることがわかる。タカオはミツコとの出会いを通して父親との和解を果たす。それは、強いから生き残り弱いから死ぬという自らの死生観の乗り越えへとタカオを導くだろう。

では、「怖かった」とだけ記された体験そのものもまた、父親と和解したことにより乗り越えられたのか。それとも別の何かを彼の心に残したのだろうか。それについては作者は沈黙する。タカオを乗せたバスは「クラクションを鳴らし、一目散に宮島にむかっていた」。「一目散」という表現からは退屈な、居心地の悪い、気の重い、組み込まれた企画を予定通り終えられてやれやれした、といった生徒や教員の正直な気持ちを感じとれる。

9. 言葉よりも身体に

和解の装置に原爆の記憶を使う方法は「似島めぐり」⁽¹⁸⁾にも認め

られる。「似島めぐり」は次のような物語である。高二の「私」には、自分や母と長年疎遠なまま逝った祖母がいた。祖母が、被爆した家族の中の唯一の生き残りで、ある児童養護施設で育つたこと以外は、「私」は「ほんとうに祖母のことを知らな」かった。しかし思い立って、やはり被爆サバイバーである老人の案内で施設を訪ねる。物語は、少女の姿をした祖母の幻影を見たところで終わる。ここでも原爆の記憶は和解へ至るための装置として用いられた。『被爆のマリア』収録中の「永遠の火」でも、疎遠にしてきた実家と主人公を原爆の火が近づける。

当初はネットを媒体にして若者へのメッセージを綴っていた作者が作家へ転身したきっかけは、兄が長い引きこもりと家庭内暴力の末に四三歳で孤独死（餓死）したこと、自分自身の出産、加えて母親の死などが重なったことにある⁽¹⁹⁾。肉親関係の難しさと和解の可能性を考えることは作者にとって非常に重要なテーマであり、「時の川」でもこのテーマが透視されている。と同時に、作者自身が原爆という大きな問題と取り組む上で方法的な拠り所とした可能性は否定できない。

しかし「時の川」をタカオと父親の和解の物語としてのみ読んだ場合、直ちに次の問題に突き当たる。放射線による極めて特異な大量殺戮死からその特異性が脱色され、それ以外の不条理な死や病死も含めた死一般に包括されて語られることは、果たしてよいのかという問題である。戦争の悲惨さや平和の大切さを次世代に伝えたいという願いは、かつての戦争への深い反省から汲み出されたものであり、そこから生まれた言葉は歴史的な文脈の中に置かれている。その言葉が受け手側の事情に応じて歴史的な文脈を外れ、自己成長

や自己啓発、自分探し、時にはヒロイックな冒険ファンタジーの文脈にずれたり乗っ取られたりして消費されることに危うさはないのか。²⁰⁾ 戦争があらゆる人間的テーマと高い親和性を持つことにはいくら慎重になってもなりすぎることはない。「怖かった」体験の全てがタカオが父親と和解する為の試練に還元されてしまうとしたら、「時の川」は原爆体験を道具として使った単なるタカオの成長物語で終わってしまう。

川口隆行は『原爆文学という問題領域』の中で「死者の記憶、死者の痕跡を生者がおのれのアイデンティティ構築に利用することを戒め」た宗教学者、佐藤啓介の言葉を引きながら、「都合のよい死者の動員」に警鐘を鳴らしている。²¹⁾

だが興味深いことに、「時の川」では、原爆体験との出会いがタカオと父親の和解の装置として使われつつ、さらに和解の物語を通してタカオと読者を原爆の記憶に出会わせようとする道筋が示唆されている。再度確認しよう。作者はまずタカオにミツコの証言を「恣意的に横領」させることで、「正しさの暴力性」の発動を押さえる。次いでタカオにミツコの顔から首にかけて刻まれた傷跡を視させる。ここで補足をしておく、ミツコの身体がタカオにまなざされるだけでなくタカオの身体もまたミツコにまなざされること、そのような異形の身体をタカオが持つてゐることは非常に重要である。なぜならば常に他者からの好奇や同情の視線にさらされてきたという点で両者は同じだからである。ここに、小児癌のサバイバーであり後遺症を引き受けて生きる少年を記憶の引継ぎ手として設定しなければならなかった理由は明らかである。

さて、作者はさらに、立ち去っていくミツコの全身を背後からタ

カオに視させる。そしてついには、とうかようやくやくにして、最後にミツコの体験を追体験させるべく、幻視の世界へ迷い込ませるのである。

ここからわかることは、作者が言葉ではなく身体に刻まれたものの方に記憶を継承させる可能性を見ているということである。じつはミツコの言葉が「ぼとりと足下に落ちた」くたりにには続きがある。

地面にはたくさんさんの蟻が列をなしている。つられるようにタカオも足下を見た。なにかが落ちた。それが見えた気がした。

(九九頁)

言葉による継承には限界があることを象徴的に語っている。タカオの身体性とさらには彼の父親の身体性とミツコの身体性が共鳴しあうところをカット切開した痛みを通してしか、互いの違いを乗り越えられないのだともいうようだ。

ではなぜ言葉ではなく身体なのか。

次に引用するのは作者が若い読者に向けて語った文章の一部である。

私は若い世代の方に伝えたいのです。過去の問題にいくらリアリティを感じようとしても、そこには限界があります。私は十年、原爆の取材をして、放射線を浴びせられた方たちの記録を読み、お話を伺っていますが、それを自分のことのように感じることがやはり不可能でした。(略)／共感とは同情のことではありません。おかわいそうに、辛かったでしょうにと、涙を流しても、他人である私は翌日にはもうそれを忘れて生きていくことができます。他者の体験には至れない。せつないことですが、これは人間の宿命であり、どうしようもありません。²²⁾

また、著者はしばしば「実感できない」を繰り返す。「実感できない」ということをとことん実感しなければ⁽²³⁾ という具合である。

調べれば調べるほど実感から遠ざかるもどかしさが作者にこうした書き方を選ばせたのではないだろうか。事実、『被爆のマリア』出版に際してインタビューを受けた作者は次のように述べている。

結局、「まだ関わる事ができない」というジレンマを描くことになりました。それでも、読んだ人に平和について考えてもらえばうれし⁽²⁴⁾。

わからなさを引き受けてさらにその先に行こうとする時、作者が求めたのは、身体に刻まれた時間を遡ることだったのではないか。

再び『うそつき咲つべ』を引き合いに出すと、作中、語り部の咲子が「せなかに火がついてアツクテ、アツクテ、ころげまわったけれど消えないので、川へとびこんで消しました⁽²⁵⁾」と語るくだりがある。しかし咲子が傷痕の一部を晒すことはない。もちろん語りが嘘である以上は見せようがないのだが、それ以前に物語上、想定されていないからである。咲子はガラスの破片が被爆者の身体の中を巡ることについても語っているが、それらは言葉の喚起力に依拠している。語り手自身の身体に刻まれた被爆の痕跡までが記憶の継承の為に動員されることはこの作品ではない。

タカ才のすぐ隣に、油断をすればつい見入ってしまう異形の身体が無防備に晒されていること、幻視の広島の中で死者の糜爛した皮膚の一部が靴裏にへばりつき、こすりつけて剥がしながら歩いたこと。「時の川」に見られる身体性へのこだわりを確認しておきたい。

10. おわりに

以上が「時の川」を巡る考察である。作者の悪戦苦闘ぶりからは戦争を知らない世代が、さらに若い世代に向けて戦争の記憶を語る困難さが伝わってくる。

最後に次の二つをまとめとして記しておく。一つは自明とされている社会的イメージに縛られずに個人と個人で向き合うことから始めませんか、と呼びかける作者の声が聞こえることである。「被爆者とはこういう人である」「語り部とはこういう人である」という、メディアなどを通して形成されてきたイメージにいつのまにか私たちは縛られていないだろうか。ミツコもまた、「語り部とはこうである」「語り部とはこうでなくてはならない」という語り部の社会的役割や使命感に縛られてきたのではないだろうか。既に述べたように語り部そのものが戦後世代の要請から生まれたものであることを考えれば、ミツコを追い込んだのは私たちであるとも言える。私たちが戦争の悲惨な記憶を伝えて下さいと戦争体験者に求めること、体験者を期待の地平へと追い込んでしまう危険を冒していることにも自覚的であるべきだろう。それは他でもない、私たちの世代が戦争体験世代に対して発動してしまう「正しさの暴力性⁽²⁶⁾」である。

互いが個人と個人として向き合い、痛みを心を寄せ合い、互いの寛容さの分だけ感情の行き交いを許し、わからなさを共有するところから始めたいという作者のメッセージを聞き逃したくない。

二つ目は、作品というよりは作者の作風が内包する危うさについてである。言葉よりも身体を抛り所に戦争の記憶に迫る姿勢は、

絵に例えるなら輪郭線を消して対象を描く方法に似ている。空気、色彩、光と影、気配などを通して迫ろうとするのである。田口ラundenイは霊媒やシャーマニズムといった超自然的で神秘的な要素を好んで取り入れる作家であるが、その手法には論理や合理性を超えて対象の本質に迫る可能性と論理や合理性を解体して対象の輪郭を曖昧にする危うさと同居する。また、今回の場合は、タカオが、病気の影響が外形にもそれとわかる少年として設定されたことで、被爆者に注がれる「まなざしの暴力性」は回収されたかのように見えるが、被爆者の身体をまなざす視線の暴力性については考えるべきことは少なくない。

いずれも今後の課題としたい。

注

1 戦争を題材にした児童文学、としたのは、ジャンルとしての「戦争児童文学」と区別しなかったからである。ジャンルとしての「戦争児童文学」は一九六〇年代前半に成立をみた。一般的には主としてアジア・太平洋戦争の体験者が、非体験者である子どもたちに向けて反戦、平和の強い願いのもとに自己の体験を物語化した作品群をこう呼ぶ。また書き手が非体験者であってもよく、さらには完全なフィクションとして多様な戦争を描いたものもここに含める。ただし、本来「戦争児童文学」という場合には、戦後のいわゆる反戦的な戦争児童文学だけでなく、長谷川潮が提示しているように、近代以降に書かれた戦争賛美の少年少女小説や児童読み物一般をも広く網羅するべきだと筆者も考える（長谷川潮「戦争児童文学研究に向けて」『児童文学研究』第五〇号、日本児童文学学会、二〇一八、参照）。だが、ここでは論を進

める上でジャンルつまり定義はさほど重要ではないと考えて、戦争を題材にした児童文学とした。

2 二〇一九、二二、一六、筆者宛の私信メールより。拙稿が今の形になる以前の段階で、藤田のぼるに見せたことがある。私信はその時にもらったものである。『屋根裏の遠い旅』の名前が出てくるのは、藤田に見せた原稿の中で筆者がこの作品に触れているため。なお、（ ）内も藤田による。

3 一九九〇年代に入ってから、それまでの近現代史を「自虐」的なものとして否定し、日本人としての「自信」を持てる歴史に修正すべきと主張する、いわゆる「自由主義史観」を唱えるグループが現れる。この主張は具体的には一九九六年の「新しい歴史教科書を作る会」の結成へとつながる。また、事実や長年の学術研究に裏付けられた真摯な批判が冷笑的態度で無化される例は、昨今枚挙に暇がない。倉橋耕平は、ディベートという、本来ならば知性を互いに高めあうはずの知的共同作業が、実際には歴史修正主義や反知性主義と結びついている現状を分析している（『歴史修正主義とサブカルチャー』青弓社、二〇一八）。

4 ポピュラー・カルチャーというとなんとなく「好戦的」なミリタリーカルチャーをイメージしがちだがそれほど単純ではない。席巻しているのは否定できないが、例えば中西新太郎の『若者は社会を変えられるか？』（かもがわ出版、二〇一九）を読むと、この領域が戦争とセンソウを巡って激しくせめぎあっていることがわかる。このことは書き添えておきたい。その上で、凶鑑『はじめてのはたらくるま』（講談社、二〇一八）に自衛隊の戦車が掲載されるなど、未就学児といういわば無防備な層をターゲットにミリタリー色を出してくる（『週刊金曜日』

一二六号、二〇二〇・一・三一、三〇〜三一頁）動きは今後も予想される。

5 『被爆のマリア』（文藝春秋、二〇〇六）に収録。初出は「文学界」二〇〇五・八月号〜十一月号。また文春文庫（二〇〇九）。

6 下嶋哲朗『「平和」は退屈ですか』（岩波書店、二〇〇六、六頁）

7 米山リサ『広島 記憶のポリティクス』（岩波書店、二〇〇五、一三九頁）

8 「語り部」という呼称については根本雅也『ヒロシマ・パレードクス』（勉誠出版、二〇一八）参照。

9 山口誠『広島、ヒロシマ、広島、ひろしま』（『複数のヒロシマ』青弓社、二〇一二、二九八頁）参照。

10 注8参照。

11 注7、一四〇〜一四一頁。

12 注8、一六三頁〜九頁参照。

13 注9、六八〜一七四頁。同様の指摘を筆者も「創作時評 物語の奥行き、いのちの奥行き」（『日本児童文学』日本児童文学者協会、二〇一四、五一〜六月号、八八〜八九頁）で行ったつもりである。

14 注7、「第三章 証言活動」一三三〜一六六頁参照。

15 注7の中で、米山リサは多くの生存者が言葉による再現と伝達は不可能だと考えているとし、「空しさ」「深いベシミズム」という言葉で彼らの心情を説明している。

16 長崎源之助『うそつき咲つべ』（俊成出版社、一九九五）

17 ここから、咲子とは何かという興味深い問いが立ち上がってくる。例えば、広島の怒りや痛み、祈りなどの総合体が咲子なる人物を抛りしるにして次世代に語りかけているという解釈も可能になる。その場合、

咲子は死者の声を聞き伝える巫女的存在として広島に選ばれたことになる。

18 『コレクション戦争×文学 19 ヒロシマ・ナガサキ』（集英社、二〇一一、ただし初出は「野生時代」二〇〇六）

19 『「コンセント」(幻冬舎、二〇〇〇)、『できればムカつかずに生きたい』（晶文社、二〇〇〇）等参照。

20 高井昌史編『「反戦」と「好戦」のポピュラー・カルチャー』（人文書院、二〇一一）の中で、山本昭宏は映画『夕風の街・桜の国』のテーマが「出自の選び直し」にあるとした。出自の選び直しとは自分探しとか自己確立ということだろう。そのように指摘した上で「原爆は物語を盛り上げるために用意された人工的な障壁に過ぎなくなるだろう」（第四章『夕風の街 桜の国』と被爆の記憶―一四三頁）と疑義を唱えている。また円堂都司昭『戦後サブカル年代記―日本人が愛した「終末」と「再生」』（青土社、二〇一五）を読むと、私たちがいかに膨大な「戦争」と戯れ消費し尽くしてきたかを痛感する。「反戦」を「正しい」としつつ「特攻兵」から生き方を学ぶ、つまり「反戦」と「殉死」が矛盾なく繋がる「特攻の自己啓発的な受容」に言及した井上義和『未来の戦死に向き合うためのノート』（創元社、二〇一九）も参照されたい。

21 川口隆行『原爆文学という問題領域』（創言社、二〇〇八、二二七〜二二八頁）

22 『ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ―原子力を受け入れた日本』（ちくまプリマー新書、二〇〇一、五五〜六頁）

23 『根をもつこと、翼をもつこと』（晶文社、二〇〇一、八七頁）
24 「被爆国から2012」（朝日新聞、二〇一一・六・三〇（土））

25 注 16、五二頁。

26 体験者に対し、あなたの体験を聞かせて下さいと言うことが体験者の心に引き起こす複雑な感情の作用といったものを推し量ることの難しさを、筆者自身もきちんと考えてこなかったように思う。ノーマ・フィードルの『天皇の逝く国で』（みすず書房、一九九四）は、語りえない体験を語ろうとする当事者に向き合うときの聞き手側の覚悟について、自身の体験をもとに考察している。

また、福岡良明は『戦後の日本、記憶の力学』（作品社、二〇二〇）の中で、聞き手側の姿勢の中にある「期待」を語り手側が察知し（あるいは語り手側に察知させ）、結果的に聞き手側の「期待を内面化した」「記憶」の語り「ばかりが「量産され」れば、つまるところ、新しい記憶の継承が、それまでに積み重ねられた記憶の忘却に寄与することになりかねない危うさを指摘している。福岡の指摘をわかりやすく例えれば、新しい情報が次々と更新されることで、いつのまにか過去の情報が消えていくようなものである。この時、忘却されていくのは過去の情報の連なり、歴史である。

非体験者が体験者の言葉に耳を傾けるとき、非体験者は自分が知らず知らずに歴史の忘却に手を貸すことになっていないかを自問する必要があると思う。

資料 広島への修学旅行と「語り部」

反原爆運動の主な流れ

一九五五・八・六

第一回原水爆禁止世界大会（前年のピキニ環礁でのアメリカ力による水爆実験で第五

九

一九八一

一九八二・一

三・二二

七

一九六八・七

一九七〇

教育現場の主な流れ

（行政側の動き）

一九六八・七

一九七〇

福童丸が被爆したことをうけて「被爆者が、要請されて全国各地に派遣され、体験を語る」「被爆者招聘運動」起こる。

原水爆禁止日本協議会結成。

*六〇年代に党派間対立から運動が分裂。

ローマ教皇の広島訪問。被爆者に国際的な注目が当たり始める。

文学者らが非核三原則の遵守を政府に要請。

「82年平和のためのヒロシマ行動」に約二〇万人。

国連軍縮第二回特別総会に西欧でデモ、七〇〜一〇〇万人。

*欧州への核ミサイル配備、米ソの核開発競争への危機感の高まりが背景に。

↓被爆者とその語りへの関心が高まる。

広島市教育委員会が被爆体験の継承を系統的に学校教育に組み入れることを表明。

同委員会、平和教育関係費を予算化。翌年『平和教育の手引き』作成。平和教育のねらいが被爆体験の継承であること、明記。

*「平和教育」という言葉、定着。

一九八二

自治体が非核平和都市宣言を採択する動きが全国的に広がると、採択した自治体の教育委員会が広島修学旅行を認める流れが始まる。

〈教員側の動き〉

一九六九

広島被爆教師の会結成。

一九七一

日本教職員組合の支援下で原爆被爆教師の会全国連絡会議結成。

一九七二

広島平和教育研究所設立。

一九七六

全国被爆教師の会総会で、「被爆地広島、長崎の両市を修学旅行で訪れる運動」の展開が決議される。

*この時期の「平和教育」の特徴

1 組織化

2 被爆体験の次世代への継承を目的とする

3 「政治性」の回避。反核運動の分裂を受け、イデオロギー的対立や党派性を

持ち込まないこと、社会運動とは切り離すことが、以後、前提となっていく。

元号法制化

いわゆる教科書問題起きる。中韓からの批判。

一九八五

中曽根首相と閣僚の靖国神社公式参拝
*教育現場において国家主義的価値が強調

一九八〇年代後半以降

され始める↓広島への修学旅行ブームと、「語り部」への高まる要請（不満）
1 被爆者は沈黙しないで積極的に証言を。
2 加害者としての広島について触れる証言を。

1 広島への修学旅行低迷。沖縄へ移る。

2 「語り部」への依頼が学校から行政（平和文化センター）主導に。

3 観光に組み込まれる。

4 教員の下見、事前指導が減り、業者任せになっていく。

5 何が政治的であるかの検証がないまま、「非政治的」⇨「平和教育」という枠組みが継承される。

「語り部」活動の展開

一九七六

江口保による葛飾区立上平井中学の実践（上平井方式として定着）

1 慰霊碑の前で。

2 遭族から直接話を聞く。

原爆被害者証言のつどい、発足。

1 医療ソーシャルワーカーの助力。

2 被爆体験の継承を使命とする。

3 イデオロギーや特定団体から距離を置く。

一九八二

一九八四

4 学習会、アンケート等を通して、よりよい語りをめざす。

ヒロシマを語る会、発足

1 被爆者らによって結成。

2 大阪西成高校の修学旅行生に語ることに
がきっかけ。

3 被爆体験の継承を目的とする。

4 イデオロギーや特定団体から距離を置く。

5 少人数の聞き手に（西成方式）

（備考）

*資料作成にあたっては以下の著書を参考にした。

・ 米山リサ 『広島 記憶のポリテイクス』（岩波書店、二〇〇五）

・ 山口誠 「広島、ヒロシマ、広島、ひろしま」〔『複数のヒロシマ』青弓社、二〇一〇〕

・ 根本雅也 『ヒロシマ・パラドクス』（勉誠出版、二〇一八）

*傍線は資料作成者の相川によるもの。